

## 17世紀前半期ロシアの国家・社会・戦争 — スモレンスク戦争 (1632-34年) 再考 —

State, Societies and War in Russia in the first half of the Seventeenth Century :  
Reconsideration of the Smolensk War (1632-34)

浅 野 明  
ASANO, Akira

キーワード :

Key words : Russia, War, the Seventeenth century, Smolensk

### はじめに — 考察の前提 —

ロシア連邦の西方国境からドニエプル川を東へさかのぼること60キロあまり、モスクワの西方420キロほどのところに、スモレンスクの町がある。ここは、東スラヴ人種族連合の一つクリヴィチの町として、年代記862-865年の条にすでに言及されており、キエフ・ルーシ時代にはいわゆる「ヴァリャグからギリシアへの道」を構成する都市としてその名が挙げられていた。12世紀半ば以降のポスト・キエフ期つまりキエフ・ルーシがしだいに解体に向かい、諸公国の分立が進む時期には、スモレンスク公国の中心都市となった。<sup>1)</sup> 13世紀に入り、モンゴル・タタールの侵攻と支配を受けてルーシの政治・経済の中心がキエフからウラジーミルやモスクワを中心とする北東部に移っていくと、これらの都市と西方を結ぶ街道上に位置するスモレンスクの意義はさらに高まった。反面、その地政学上の位置からカトリック勢力の侵攻を受けることも多く、この点では苦難の歴史を歩むことになる。例えば、1404年から1514年まで、当該

公国はリトアニア大公国の支配下におかれた。また、動乱時代の1609-11年にはポーランド王ジグムント3世(位1587-1632)の侵入を受け「スモレンスク攻囲戦」(《Смоленская осада》)あるいは「スモレンスク防衛戦」(《Смоленская оборона》)として知られる激戦の末にその支配下におかれた。<sup>2)</sup> 1613年に全国会議によって新たにツァーリに選出されたミハイル・ロマノフの政府にとって、外交面における主要な課題の一つが、この地域の支配権の回復にあったことはいうまでもない。しかし、政府には、その前にまず解決しておかねばならない課題があった。それは、ツァーリとしてのミハイルの正当性を国の内外において確立することであった。<sup>3)</sup>

17世紀にいたっても、ロシアの政治は決してツァーリの専制であったわけではない。<sup>4)</sup> 中央および地方統治における実際上の権力は貴族たちによって握られており、彼らの同意と協力なしには、ツァーリといえども権力を現実に行使することはできなかった。これまでのロシアの統治構造は、ツァーリと貴族、

とりわけ貴族会議を構成する名門貴族との協働にほかならなかったのである。しかし、門地制によって複雑に絡み合う権力の網の目の中心に座っていたのはまぎれもなくツァーリであったから、どの貴族家系と結びついた、どのような個性の人物がそこに座るのかということが、貴族たちにとってはもとより、この統治システムにとっても決定的に重要であった。言い換えれば、ツァーリに選ばれたロマノフ家のミハイルにとって、直面するあらゆる課題解決の鍵が、自らを正当なツァーリとして国際的・国内的に認めさせることができるか否かにあったといっても過言ではない。しかし、これがミハイル政府にとって難題であった。その理由は、もちろん第一義的には、彼が血統によらず、諸階層の合意によって選出されたツァーリであるという事実にあるが、しかしこれだけが重要な理由であったわけではおそろくない。この本質は、17世紀初頭の動乱によって社会諸階層の分断と対立がいつそう深く鋭くなっていたため、新たなツァーリにとって、多くの人々の合意を取り付け、社会を再び統合していくことがそもそも容易ではなかったという事実にある。時代を少しさかのぼって、この問題を考えてみよう。

16世紀前半つまりイヴァン4世雷帝（位1533－84）の長い統治の初期に、ロシア社会は、政治の安定や農村経済の成長、商業活動の活性化と都市の発達などによって新たな勢力が台頭し、その構造を大きく変えつつあった。おそらくはこのことを自覚して、イヴァン4世も16世紀中葉に一連の改革を試みた。それはひとことでいえば、慣習的な運用によっていた法を整備するとともに、新たに台

頭してきた士族・小士族などの勤務人層やボサード民（商工民）にも一定の政治的な役割を認めることによって、ツァーリの権力基盤を強化しようとするものであった。その方向性自体は、理にかなったものであったといえよう。しかし、リヴォニア戦争（1558－83）の戦況悪化とともに、ツァーリと貴族の反目が顕在化してくる。結局のところ、彼の政治改革は、ツァーリと権力を分かち合うことを伝統的権利とみなし、既得権の侵害にとりわけ敏感であった貴族からの協力を得ることができなかった。一方、これまで権力から締め出されていた下位の諸階層とのあいだには、具体的な政策をめぐって対話の糸口すら見出すことができなかった。ツァーリが、自らの専制的な権力の神聖性を強く主張し、諸階層にはただ従うことのみを要求したからである。このような閉塞状況のなかで、ツァーリがその意志を貫くために採った政策が、自らに忠実な者たちを動員した強権の行使、オプリーチニナ（1565－72）のテロルであったが、その結果は社会の分断と混乱に拍車をかけたただけであった。

正統のツァーリであるイヴァン4世の存在とその強権によってかろうじて維持されていた社会の統一性は、イヴァンの死とそれに続く王朝の断絶というロシア史上空前の事態によって、深刻な危機に直面した。周知のように、ボリス・ゴドノフ（位1598－1605）のツァーリ登位については、貴族のみならず各階層内に疑念と不満が抜きがたくあり、それが1601－03年の大飢饉と重なって、未曾有の社会不安を引き起こした。<sup>5)</sup> その後も、ツァーリを称する者が相ついで現れ、その正当性にも疑義があるという状況の中で、これまで

ツァーリとともに権力を分かち合うことで利害を調整してきた貴族のあいだでも、ツァーリの選出をめぐる対立が顕在化した。その安定性が強く求められる中央権力をめぐって展開された支配者層の深刻な対立は、身分制の仕組みを媒介として社会の下位の諸階層にも直接の影響を及ぼさざるをえなかった。

16-17世紀のロシアにおいて、各社会層は、国家に対する勤務の態様にしたがって位階に序列化されていた。<sup>6)</sup> 第一の位階は、貴族会議を構成する名門貴族たちであり、その多くが「公」の称号を持っていた。その下には、さらに細かく序列化された貴族の位階が続いた。これらの貴族に準ずる位階を占めていたのは、「生まれ」による勤務人（служилые люди по «отечеству», отечественные служилые люди）つまり、騎兵として軍事勤務を果たす勤務人層で、中心を占めるのは士族・小士族と呼ばれる中小の土地所有者たちであった。彼らは、より細かく区分された位階に従って、戦時のみならず、平時には在地の有力者として、貴族の下で地方統治の実務を担っていた。さらにその下位には「徴募」による勤務人（служилые люди по «прибору», приборные служилые люди）つまり、平時には国家からある種の特権を与えられて各自の営業を営みつつ、戦時には銃兵・砲兵など各兵種の歩兵として勤務する義務を負う人々が、これも種々の位階に応じて配置されていた。したがって、国制つまり権力構造との関連でごく一般的な言い方をすれば、16世紀後半～17世紀前半のロシア社会は、門地制に基づく序列のもとで権力を独占している貴族層、軍事と政治の実務において重要な役割を果たしながら、持ち前の武力を背景に

嘆願書を提出する以外にこれといった政治的手段を持たない中間的な勤務人層、さらには、政治からほぼ完全に閉め出された結果、共同体に依拠して嘆願書を提出する以外に発言力のない下級勤務人層やボサード民および農民たちから構成されていたといえる。しかし現実の身分制は、はるかに細分化された位階制によって社会を分断しており、その一方で、政府の打ち出す政策に起因する政治的な圧迫や経済の混乱により、農民や都市下層民のみならず、士族以下の中小勤務人までが居住地や勤務義務を放棄して「自由民」（《вольные люди》）の集団に身を投じる事例が珍しくなく、旧来の身分制秩序は大きく動揺していた。このような動向から、しだいに新たな社会勢力として既存の身分制のいわば枠外に生まれてきたのが、カザークであった。

カザークの歴史について詳しく触れることはできないが、<sup>7)</sup> ここでは次の点だけを確認しておきたい。それは、カザークといえば、農奴制などの束縛を嫌ってロシア南部辺境に逃れ、そこで独自の集団を形成し、のちにはロシア政府から国境の防衛を委ねられた軍事集団というイメージでとらえられることが多い。このような理解はもちろん誤りではないが、これをあまり固定的に考えると、歴史的に理解のおよばないところが出てくる。とりわけ16世紀末～17世紀前半については注意が必要である。まず、カザークには、南部や東部の諸都市に配属されて特別の居住区に住み、都市防衛に当たる「都市のカザーク」（《городовые казаки》）と呼ばれる人々がいた。彼らは、独自の位階を形成していたが、「都市の士族」と呼ばれる人々と同様、政府の統治組織に組み込まれた勤務人であった。

これに対して、より重要なのはもう一つの範疇、つまり「自由カザーク」(《вольные казаки》)と呼ばれる人々である。のちに辺境防衛を担うことになる人々も、この時期には、まだその多くが自由カザークの集団の中にいた。政府とカザークとの関係は、未だ流動的な状況にあったのである。周知のように、彼らの多くは、農民、都市の貧民や貴族のホロープ(奴隷)など、経済・社会の崩壊状態の中で行き場を失った諸社会層から出現してきたもので、辺境地域というよりはむしろ首都モスクワの周辺にあって独自の集団をつくっていた。この集団を解体するだけの能力も手段も持ち合わせていなかった政府は、彼らに一定の義務を負わせることで、その存在を容認せざるを得なかった。ロシア政府から穀物や各種の物資の提供を受ける見返りに、彼らは、ときには軍事集団としての勤務義務を負った。その限りでは彼らもロシア軍の一部であったといえるが、容易に想像できるように、両者の関係はそれほど単純なものではなかった。形式的にはともかく、実質的にはカザークは政府とつかず離れずの関係を保っていたのであり、両者の関係は、そのときどきの具体的な力関係や政治状況によって規定されざるをえなかった。カザークにとってロシア国家とは、それなしでは済まされないものではあったが、かといって、何にもましてそれを優先しなければならないというものでもなかったのである。

カザークは、平時においても独自の自治団体を形成する武装集団であって、その点ですでに既存の身分制秩序あるいは政治体制からはみ出していたといえる。言い換えると、彼らには、ロシア国家という枠組みには収まり

きれない独自の利害があったということである。その結果、カザークはときに「盗賊ども」(《воры》)と呼ばれる略奪者の群れと化した。とりわけ、凶作・飢饉などの非常時には、カザークが徒党を組んで貴族や士族の館や所領を荒らすのは珍しいことではなく、例えば1601-03年の大飢饉のときに、モスクワ周辺ではこれがすでに一般的な現象となっていた。<sup>8)</sup> 凶作と飢饉により居住地を捨てざるを得なくなった農民や、主から追い出されたホロープなどは、カザークに合流するしか生きる道がなかったからであり、その後のさらなる動乱の中で、この動きがいっそう加速し大規模になっていくのは避けがたかったであろう。彼らの略奪行為は、自らの生存のためにおこなわれるという面があったから、モスクワの市民が飢餓に苦しんでいようと、外国との戦争中であろうと、お構いなしに実行された。後述するように、スモレンスク戦争のただなかに、カザークは首都モスクワの周辺で徒党を組み、貴族・士族にかかわりなく領主層の所領を荒らし、農民に対しても遠慮なく暴行・略奪を働いた。他方で、カザークは独自の武装集団として、行き場を失った種々の人々を絶えず吸収し増強されていた。やや単純化していえば、首都近郊での自由カザーク勢力の消長は、社会に対する政府の統制力を計るバロメーターであったともいえよう。

とはいえ、彼らが武装集団としてその存在を誇示したのは、なんといっても戦時であった。政府から命令があったとき、カザークは、自らの利害にとってそれが有利であると判断すれば、政府によって任命された貴族の軍司令官の旗下部隊として戦闘に参加することもあった。しかし、自らに何の利益もないとな

れば、あえて血を流そうとはしなかった。また、たとえ政府軍の一翼を担うことになっても、彼らは可能な限り独自の軍団（войско）を維持したまま、つまり固有の司令官（頭領 атаман）の下でのみ行動しようとした。国内にこのような集団を抱えたまま外国との全面戦争に入れば、政府にとって困難な事態を招くことは十分予想された。カザークを参戦させて戦力を整えるためには、まず政府の側が何らかの譲歩を行うことが前提となったからである。スモレンスク戦争においても、ミハイル政府は、何とかしてカザークを政府軍の指揮下に収め、反ポーランドの尖兵として使おうとした。一般論としていえば、この政策を実行するに当たって、政府の側に有利な条件と不可欠の前提があった。前者についていえば、後述するように、カザーク軍も決して一枚岩であったわけではなく、政府に忠誠を尽くそうとするグループも、多数ではないにせよ存在したという事実である。これはカザークと政府のあいだの矛盾に満ちた関係の反映であったから基本的に解消されることがなく、ここに政府の介入の余地があった。後者については、中核となるカザークをその周辺の人々、とりわけ農民から切り離すことであった。実際、ミハイル政府は前者の条件を利用しながら、後者の課題を果たそうとしたことが伺える。<sup>9)</sup> いずれにせよ、カザークを政府軍に編入することを目標として、政府はそのための努力を辛抱強く続けた。小稿が明らかにするように、この政府の姿勢が、スモレンスク戦争の帰趨において大きな意味を持つことになろう。

以上をまとめていえば、動乱後のロシアは、一時の政治的混乱は収束に向かっていったもの

の、ツァーリの権威が十分に確立されていないだけでなく、旧来の身分制の位階・階層秩序は危機に瀕しており、そのうえ政府の統制が十分に及ばない武装集団までが首都近郊を徘徊しているという状況であった。このような社会に、まがりなりにも統一性を与えることができるとしたら、それは正教会の文化的な統合力と正当なツァーリによる統治にほかならなかった。ただ、前者はさし当たって後者によって支えられていたから、16世紀末に始まる混乱した社会に秩序を取り戻し、事態を沈静化させられるのは、結局のところツァーリの安定的な登位による統治権の確立のみだったといえるのである。

このようにみてくると、いくつもの不安定要因を抱えながら、<sup>10)</sup> あえてポーランドと戦端を開く道を模索し始めたロシア政府の思惑もみえてくる。西部の要衝スモレンスクの回復をめざす戦争は、政府にとって、眼前の困難な諸課題を同時に解決するための方策であったとも考えられる。宿敵ともいえるカトリック国を相手に戦争を起こすことで、相互に分裂・反目が続けるだけでなく、政府に対しても従順さを欠いている国内の諸勢力を政府の主導下に団結させ、さらにジグムント3世とその息子ウワディスワフを破ってポーランド王に帝位要求権を放棄させ、そのうえ西方の領土からポーランドの影響を一掃することができれば、政府の権力と権威は回復し、ミハイルのみならず、ロマノフ家による帝位の継承も安定したものとなろう。実権を握っていたミハイルの実父フィラレート（1554／55－1633）が開戦に踏み切った理由については種々の見解があるが、それにしても、ロマノフ家の帝位継承を安定的なものにするこ



とが一つの目的であったことを疑うのは難しい。<sup>11)</sup> 実際、この戦争は軍事的には敗北に終わったが、しかしロマノフ政権にとっては、ポーランドからツァーリとしてのミハイルの承認をかちとったという意味で、政治的には十分な成果を収めたともいえるのである。

しかし、仮にこのような理解が正しいとしても、それは、戦争がほかならぬ1632年に開始されたことの説明にはならない。たとえば戦備を整え、十分に作戦計画を立てていたとしても、戦争はひとたび始まればその後の展開は予測不可能であるし、敗北に終わったときのことを考えれば、それは危険な賭けでもあった。それでも1632年に政府があえて開戦に踏み切ったとすれば、そこには、別の事情もあったと思われる。ここで、われわれは当時の国際情勢について考えねばならない。スモレンスク戦争が開始された1632年、西欧はまさに三十年戦争のただなかにあった。三十年戦争とロシアとのかかわりについてはまったく別個に検討すべき重要な課題であって、小稿で論じることにはできない。<sup>12)</sup> ここでは、次のことを指摘するだけにとどめたい。神聖ローマ帝国とその同盟国を相手に中欧で戦っていたスウェーデンにとって、ポーランド東部でロシアに新たな戦線を開かせることは、戦況を打開するうえで非常に有益であった。そのための交渉は以前から進行しており、ジグムント3世の死（1632年4月）が、それぞれに思惑を持った両国にとって開戦の好機とみえたであろうことは理解できる。種々の不安定要因がある中でロシアがあえて開戦に踏み切ったとすれば、ロシアに早く参戦させたいスウェーデンの思惑と、ポーランド戦でスウェーデンの支援を期待するロシア政府の思

惑が一致した結果であるとみるのは、あながち見当はずれでもないであろう。<sup>13)</sup>

「1632－34年のロシア・ポーランド戦争」いわゆるスモレンスク戦争は、それ自体としては、華々しい会戦や英雄の活躍を欠いているうえに、敗北による講和という結果に終わった点で、狭義の軍事史で深く研究されることはあまりない。<sup>14)</sup> しかし、この戦争の過程で浮き彫りにされた17世紀前半期ロシアの国家と社会の流動的で複雑な諸相に注目するなら、その後のロシアの政治史・国制史の展開に、この戦争が少なからぬ影響を与えたのではないかと思われる。小稿の筆者は、以前にもスモレンスク戦争について論じたことがある。<sup>15)</sup> そこでは、主にロシアの軍隊編成とそこに反映されている社会構造の矛盾について考察した。だが、当時のロシアの軍隊は種々の構成要素からなっており、なかでも戦争の帰趨に大きな影響を与えたと思われるのはカザークであった。前稿では、このカザークの動向について、不十分な考察しかできなかった。小稿は、その点を補いつつ、スモレンスク戦争期のロシアの国家と社会との相互関係の一端に、いま一度光をあてようとするささやかな試みである。

## I. スモレンスク戦争期の軍隊と社会

### 1. 軍隊と社会

まず、スモレンスク戦争の経過を確認しながら、前稿の論旨を簡潔に振り返っておこう。<sup>16)</sup>

政府は、1620年代から、ポーランドとの来るべき戦争に備えて、まず軍隊の再編成に乗り出していた。そこでは、旧来の士族・小士族からなる騎兵軍と銃兵に加えて、外国人傭

兵を雇用した。しかし、それだけでは、西欧の「近代化」された軍隊と戦うにはまったく不十分であったから、1630年代に、社会の諸階層から幅広く新たな徴募を実施し、それを西欧式の連隊、つまり新式軍<sup>17)</sup>として編成した。注目したいのは、この戦争が全国会議の議決を経て開始されたという事実である。これは、ポーランドと戦端を開くべきであるとする意見が、ロシア社会の各階層からの合意を得ていたということにほかならない。つまり、スモレンスク戦争は、いわばロシア社会の総意にもとづいて開始されたといえるのである。この事実は、動乱後の、秩序が失われた社会を改めて統合しようと志していたミハイル政府にとって、一歩前進であったに違いない。その結果として、ロシア軍の総兵力は3万～4万になり、スモレンスクを守備しているポーランド軍約3千よりもはるかに多数となった。<sup>18)</sup> 貴族のM.B.シェインを総司令官とするロシア軍は、8月に行軍を開始し、ポーランド軍を圧倒しながらスモレンスク城下に容易に到達した。つまり、開戦当初は、戦争は政府の思惑どおりの展開になっていたのである。にもかかわらず、こうして始められた戦争は、このあと予想外の展開をみせることになった。攻城にてこずって秋までに同市を落とすことができなかったシェインは、真冬の攻囲戦に移行せざるをえなかった。<sup>19)</sup> この結果、厳寒、飢餓、疫病に悩まされて戦力も士気も低下したシェイン軍は、1633年夏、救援にやって来た国王ウワディスワフ4世(位1632-48)率いるポーランド軍2万3千によって逆包囲され、1634年2月に降伏のやむなきに至ったのである。このとき、シェイン軍は約8千になっていたという。

戦闘経過を述べれば、これだけのことである。しかし、この背後にいくつかの問題が隠されている。まず、大軍を擁したロシア軍が、比較的少数のポーランド軍守備隊の前になぜ敗退せざるを得なかったのかという、狭義の軍事史＝戦争史研究の基本的な問いが発せられよう。小稿の筆者は前稿でこの問題を検討し、ロシア軍は大軍を編成したのに敗れたのではなく、むしろ大軍であったからこそ、逆に戦闘力を弱めたのではないかと結論付けた。<sup>20)</sup> ここで重要なのは、シェイン軍の敗退が、敵の包囲や南からのタタールの侵攻といった軍事的脅威や飢餓という外部的な要因のみにあるのではないということである。そうではなく、シェイン軍には、ロシア社会の構造に起因する内部対立が以前からあり、それこそが軍の自壊を引き起こしたと思われるのである。具体的にいえば、カトリック国のポーランドと戦うという目標では一致していたものの、既存の身分制的秩序が動揺していた中では、急ごしらえで徴募・編成されたいわば「国民軍」には、軍としての組織性・統一性が欠如していたように思われる。また支配者層には、ツァーリの選出に絡んで、ポーランドに対して宥和的な勢力も存在した。戦況が膠着状態になった段階で、これらの人々の利害対立が顕在化し、さらには南部からのタタール侵攻の報などもあって、ついにはシェイン軍の戦闘力が失われてしまったという理解であった。だが、この問題は、スモレンスク戦争をもっぱらロシアとポーランドという二つの国家間の戦争という図式で考えている限り、適切な理解に到達するのは難しい。

ここで小稿の筆者が注目したのが、スモレンスク戦争の経過とその諸相を、ポーランド

との二国間関係においてではなく、当時の国際関係とロシア国内の状況とを関連させて考察したB.Φ.ポルシネフの研究である。<sup>21)</sup>彼は、シェインによるスモレンスク攻囲が始まったまさにその時期から、カザークを中心に、逃亡してきたホローブや農民を加えた武装集団による独自の運動が、モスクワからスモレンスクにいたる広範な地域で高揚した事実注目した。彼によれば、戦時に始まったこの運動を十分に統制できなかったことにより、政府はポーランドとの戦争を途中で断念せざるを得なくなったのである。これは、ロシアの社会状況からスモレンスク戦争敗北の経緯に迫ろうとしたもので、大変に興味深い考察である。さらにいえば、この運動を、当時の学界の定説に従って農民の運動であると規定しつつ、その主体が、実は農民ではなくカザークであったことを一貫して主張していることにも注目した。

以上が前稿の要点であるが、ロシア軍のもう一つの重要な要素であったカザークの自立的な運動については、ポルシネフ自身も、後年、別稿で検討している。<sup>22)</sup> 小稿では、前稿に引き続き、ポルシネフの論考を手引きとしてこの問題を改めて考えてみたい。

## 2. ミハイル政府とカザーク軍(1)

すでに述べたように、カザークと政府との関係には微妙なものがあったが、それでも原則として政府の統制下におかれていて、その限りではロシア軍の一構成要素であったと考えてよい。当然、シェインの救援が計画されたときにも、この原則に従って彼らに動員がかけられた。しかし、彼らはこの戦争の当初から政府の意向とは直接の関係なしにパルチ

ザン戦を展開しており、実際には政府軍による統制下にあるとは言い難かった。まずこの点からみてみよう。

ポルシネフによれば、シェイン軍がポーランド軍によって包囲されて窮地に立ったのを知って、政府は開戦時について二度目の大規模な動員をかけた。それは旧式軍を新たに編成したもので、貴族のП.М.チェルカスキーとП.М.ボジャルスキー旗下の四つの部隊からなっていた。<sup>23)</sup> あらかじめ注意しておきたいのは、この四つの主要な部隊の中に、当然のようにカザーク軍が含まれていて、しかも兵力からいえば第二軍を構成していたことである。順を追ってみてみよう。新編成軍の第一軍つまり主力は、上述の二人の総司令官の直接の指揮下にモジャISKで編成され、1634年2月時点でおよそ1万の兵力を数えた。そして第二軍が、ロスラヴリ軍、つまりロスラヴリを拠点とするカザーク軍である。このカザーク軍は、その初期の指導者で獄死したイヴァン・バラシの名にちなんで「バラシ軍」(《балашовцы》)とも呼ばれた。その兵力は少なくとも5-6千、のちには8千にまで増大した。第三軍が、カルーガでФ.クラキンとФ.ヴォルインスキーの旗下部隊として編成された支援軍およそ1千300であった。そして第四軍は、М.オドエフスキーとИ.シャホフスキーの指揮する1千100の支援軍で、ルジェフで編成されていた。みられるように、カザーク軍は、戦闘部隊としては2番目の兵力を持っていた。しかも彼らの拠点のロスラヴリはスモレンスクとドロゴブシまでもと120キロあまりと近く、その兵力と戦略目標との距離からみて、ロシア軍がシェインの救援に成功するには、この部隊の動向



がきわめて重要であった。対するポーランド軍は、1万6千だったからである。

政府はフィラレート死後の1633年12月に、貴族のИ.В.ナウモフのロスラヴリ派遣を決定していた。彼が司令官となってこのカザーク軍を政府軍に組み込み、モジャISK方面に行軍させて主力と合流する手はずになっていた。といっても、カザーク軍全体を一括して政府軍に編入するわけではもちろんない。政府が必要としていたのは、戦闘的で命令に忠実なカザーク軍だけだったからである。そこで、司令官ナウモフの最初の任務は、カザークに中小勤務人を含めた戦闘部隊を、逃亡民や農民から切り離すことであった。だが、この最初の任務でナウモフはつまづいた。軍の統轄の基本である兵員名簿の提出を拒否されたため、部隊の実態を把握することができず、カザークと農民を切り離すことは困難だった。ましてや、命令されていた逃亡民の逮捕など実行不可能であった。実のところ、カザークと在地の農民たちとは、日常生活においてもしばしば強い結びつきがあり、両者を切り離すのはそもそも容易なことではなかったと思われる。<sup>24)</sup> だが、戦況は一刻の猶予もなかった。シェインは、2月3日に伝令使をモスクワとモジャISKに送り、援軍の急派を要請していた。シェイン軍の忍耐ももはや限界に近づいていたのである。

ところが、戦況を左右するこの決定的なときに、ようやく動き始めたロスラヴリ軍は、司令官ナウモフの命令を無視して、主力の待つモジャISK方面に行軍するのではなく、方角違いのブリャンスク郡に向かったのである。実はロスラヴリのカザークは、ナウモフが着任する直前の1月6日に、「すべての自由

民（вольницы）」の名でツァーリに2通の嘆願書を提出し、そこで自らの要求を公にしていた。<sup>25)</sup> その要求項目の一つに、カザークの郡内通過を拒否しているブリャンスク郡の士族・小士族の不当性を訴える一項があったのである。政府が嘆願書を受理したのは1月23日のことで、早くも2日後の25日にはツァーリの返書が送付された。件の不満についての回答はいまいな内容であったが、明確に否定もしていなかったのも、カザークはこれをもって、自らの諸要求に政府の「お墨付き」を得たと「解釈」したのである。彼らは、これを前提にしてナウモフ旗下に行軍を開始することを承諾したのであったから、当然のことながら、その行軍目標はモジャISK方面ではなく、ブリャンスク郡の士族・小士族の領地であった。

こうして、ナウモフの着任からすでに1か月たった2月6日になってようやく重い腰を上げたカザーク軍は、政府の期待をまったく裏切ったのである。一方、モジャISKに集結していた主力が行軍を開始したのも、同じく2月6日のことであった。主力が、政府とロスラヴリ軍の交渉の行方を見定めていた可能性がある。1634年1～2月の一連の動きをみると、カザーク中心のロスラヴリ軍が、平素から政府に対して一定の独立性を保っていたこと、そしてその基盤が武力および農民との結合にあったことを想定させる。政府軍の主力でさえも、この軍団の参加なしには動こうとしなかったのである。政府の統制から半ば外れていたカザーク軍が戦力編成の主導権を握っているこれらの動きに、当時の政府が直面していた困難さと、ロシア社会の複雑かつ流動的な状況が現れているといえよう。

さて、遅ればせながらこうして開始された反転攻勢は、しかし、わずか10日あまりであっけなく終わることになった。救援の到着まで持ちこたえられなかったシェインが、2月16日にポーランド軍に降伏してしまったからである。まず、政府軍が行動を起こすのが遅すぎた。ポルシネフの言葉でいえば、「戦争の帰趨にとって決定的な日々が、チェルカスキーがナウモフとその部隊が来るのを待っていたために、過ぎ去ってしまった」のである。<sup>26)</sup> しかもそのカザーク軍は、結局ポーランドとの戦闘には参加せず、「味方」を攻撃していた。もちろん、カザーク軍が命令に従って速やかに行動していれば、戦況が好転したかどうかはわからない。いずれにせよ、シェインと残余の部隊8千は、降伏条件に従って2月19日にドロゴブシから撤退し、まっすぐモスクワに向かった。その後、3月初めに彼と数名の指揮官はモジャイスク近郊で、モスクワから派遣されてきたM.グレボフによって身柄を拘束され、シェインの戦いは終わった。<sup>27)</sup>

## II. カザーク軍の展開と解体

### 1. カザーク軍の展開

スモレンスク戦争で、ミハイル政府はいわば三つの戦線で戦っていた。一つは、いうまでもなくポーランドとの戦いである。シェイン軍が降伏しても、ポーランドとの戦いが終わったわけではもちろんなかった。政府としても、このまま終わるわけにはいかなかったにちがいない。しかし、事態は政府にとって予断を許さないものであった。ここに第二の戦線が現われる。ポルシネフは、宮廷において、ポーランドとの戦争の継続を主張するグ

ループと、かつてポーランドのウワディスワフをツァーリに招こうとした親ポーランド派とのあいだで対立があった可能性を指摘し、この抗争は1634年のはじめには前者が優勢になっていたと主張している。<sup>28)</sup> 確証があるわけではないが、このような対立・抗争を背景におけば、フィラレート死後の政治の動きを比較的無理なく理解できるのは事実である。シェインの降伏を契機に、後者がふたたびポーランドとの和解を模索する動きも実際にあった可能性がある。<sup>29)</sup> このような動きに対して、政府は、シェインの降伏を親ポーランド派による陰謀であるとして非難・反撃した。シェインが、逮捕後50日あまりの審理で「裏切り者」として処刑されたのも、この流れでとらえることができる。もちろん、反ミハイルの陰謀が実際にあったかどうかはわからない。政府による意図的な工作の可能性も否定しきれない。ただ、われわれにとっては、陰謀が事実であったかどうかはそれほど重要な問題ではない。重要なことは、政権の中枢に近い部分に「敵」がいて、その陰謀が現実的なこととして取りざたされるほど政権が不安定であったということである。

ミハイル政府は、シェイン軍の崩壊という現実を前にして、局面の打開を図って再び大規模な、三度目の動員をかけた。仮に和平交渉を始めるにしても、その前にポーランド軍に一撃を加えておかないことには、交渉を始めるわけにはいかなかったであろう。ここでまたしても政府の前に立ち現れてきたのが、三つ目の戦い、つまり政府軍編入をめぐるカザーク軍との交渉だった。ロシア側が反転攻勢をかけるためには、この部隊の協力がどうしても必要であったが、交渉はやはり難航が

予想された。政府が窮地に立っている現状は、彼らにとってはその立場を強める好機でもあった。そのうえ、政府にとって、この交渉をさらに厄介なものにしている問題があった。それは、この部隊が、よく組織されて統制のとれた集団では必ずしもなかったという事実である。軍団の中核がカザークであることは疑いないが、勤務を逃れてきた土族・小土族の勤務人たち、逃亡ホロープや居住地を捨てたボサード民、さらには逃亡農民にいたる雑多な人々が絶えず流入してきてカザークを取り巻いていた。前述のようにナウモフは、これらの人々からカザークを切り離すのに失敗していた。<sup>30)</sup>したがって、交渉相手のカザークの背後には、政府とは利害を異にする雑多な集団が常についていた。このような中で指導層と合意するのは難しかったであろうし、仮に合意しても、彼らが軍団全体を統率できるという保証はなかったのである。

なるほど、この状況は、軍団を内部から分断・解体させる余地を政府の側に与えるものでもあった。しかし、戦況がもう少し安定している時期ならともかく、少なくともこの軍団に対して、この段階で政府が何らかの有効な離間策を打ち出したと考えるのは難しいように思われる。<sup>31)</sup>確かに、カザークと土族・小土族の中小勤務人を、まず農民から切り離し、そのうえでカザーク軍を政府軍に編入するとともに中小勤務人を原隊復帰させるという政府の基本方針は一貫していたと思われる。しかし、既述のように、これまでのところ現地においてそれは思うような成果を収めていなかった。政府とカザークとの交渉において、この段階で主導権を握っていたのは明らかにカザークの側であった。そのため政府は、カ

ザークの出方を見きわめながら、状況に応じて種々の打開策を打ち出すというかたちをとらざるを得なかったのである。そこでわれわれも、ポーランドとの戦争が大きく局面転換した1634年2月以降の政府とカザークの動向を跡づけることで、両者の関係がどのようなものであったのか、具体的に探してみよう。

## 2. ミハイル政府とカザーク軍（2）

1634年2月半ば、まさにシェインが降伏を決意しようとしているころ、病気を理由にすでに退役を申し出ていたロスラヴリ軍の司令官ナウモフは、モスクワから帰ってきたカザークの頭領A.チェルトブルード<sup>32)</sup>とブリャンスク郡で会見した。政府から命じられた後者の任務は、政府とカザーク軍の仲介者として、カザーク軍にツァーリの軍旗を授け、ナウモフとともに彼らをチェルカスキーとボジャルスキー旗下の主力連隊に遅滞なく合流させることであった。<sup>33)</sup>しかし、チェルトブルードの忠誠は見かけだけで、実際には政府の命令を黙殺していた。彼はこの頃コゼリスク郡ドゥディンスク郷に陣営を構えており、コゼリスクから銃兵や農民をそこに呼び集めていた。のみならず、その後モスクワとモジャイスクでも、多くの人々を「扇動」して自己の陣営に受け容れた。

既述のように、ナウモフ旗下のロスラヴリ軍は2月6日に行軍を開始したものの、命令に従って北東のモジャイスクに向かうのではなく、南東のブリャンスク郡に入ると、かねてから対立していたその土族や小土族の領地を襲って、「農民の村や小村に火を放って、破壊し、その財産を奪い、土族と小土族の妻や子どもたちを捕虜に取った」。(《И во

Брянском уезде у дворян и у детей боярских по селам и по деревням крестьян жгли и ломали, и животы их пограбили, и дворянских и детей боярских жен и детей в полон имали)).<sup>34)</sup> その際、チェルトプリードは、「仲間」(《круг》)を集めると、独断でツァーリの軍旗を彼らに与え、カザーク-農民たちを「盗賊行為に (на воровство) 駆り立てた」。<sup>35)</sup> 司令官ナウモフもそこにいたが、なすべがなかったらしい。カザークたちの略奪を抑えるように、という地方長官たちの嘆願に対して、彼は、「彼 (チェルトプリード) のカザークたちは、私の言うことを聞かない」(《что его казаки не слушают》)と正直に答えている。<sup>36)</sup> 彼が、病気を理由に退役を申し出たのは、おそらくこういった事情のためであった。彼はモスクワに次のように書き送っている。「ロ斯拉ヴリから20ヴェルスター行ったブリャンスク郡のジャルニニ村で、わが罪のために病にかかりました。そのため、君主たるあなた様の兵士たちとともにあなた様の勤務に就くことができず、それゆえ君主たるあなた様のお命じになった任務が果たされないままになっております」。

(《И отошел от Рославля 20 верст во Брянский уезд в село Жарынь, и твоим государевым ратным людям ити на твою службу не с кем, и за тем твое государево дело стало》)<sup>37)</sup>

ボルシネフによれば、カザークの運動は、この時点で、つまり1634年2月後半に公然たる蜂起となった。<sup>38)</sup> 2月19日にカザークたちはブリャンスクに着き、そのボサードに2日

間とどまった。おそらく、装備と物資を補給するためだったのであろう。彼らは、ここでもスロボダールの住民を略奪し、士族と小士族の馬を奪い、若干の銃兵を殺害した。また、ブリャンスクのやや南東にあるカラチェフでも、士族・小士族の領地を荒したことが、士族たちの嘆願書から知られる。そんな中、モジャイスクの軍務から逃亡してくる者もいた。<sup>39)</sup> 2月22日にカザークたちは、さらに東進してコゼリスク郡に入った。前にのべたように、このドゥディンスク郷にはすでに頭領チェルトプリードの陣営があり、その後の1か月のうちに、新しい人々がさらに合流してきた。その中には、下級勤務人である銃兵の集団逃亡も含まれていた。2人の銃兵隊百人長の訴えによると、彼らはカルーガからロ斯拉ヴリに向かっていたのだが、その途中で100人の銃兵が陣営に逃げてしまったというのである。訴えを受取ったナウモフは、これらの銃兵の探索と引渡しを頭領らに求めたが、彼らは、「われわれは、わが軍に人々を呼び込んではおりませんし、われわれのところから立ち去らせてもおりません。」(мы де к себе в войска не призываем, а от себя не отсылаем)<sup>40)</sup> と答えて探索を拒否した。ナウモフはこの間の状況について、「君主たるあなた様の連隊からあらゆる勤務人たちが、また都市の士族と小士族からその奴隷たちも (陣営に) やって来ております。」(《приезжают из полков твоих государевых служивые всякие люди, и от дворян и детей боярских разных городов боярские люди》)と書いている。<sup>41)</sup> ここでも、かつてのロ斯拉ヴリと同様に、ロシア各地から農民、ボサード民、銃兵その

他が合流を続けた。もちろん、カザークが農民たちに逃亡をそそのかすこともあった。その実態は、6月になって政府軍に投降した者たちの尋問調書からある程度わかる。中には、モスクワその他の都市からチェルトブルードに付き従って来た者もいた。例えば、И.А.ファナシエフなる人物は、「ニジニ・ノヴゴロドからヴォルガに出て、そこからモスクワに行き、その後アニシム・チェルトブルードの自由カザークの村(станция)におりました」と語っている。<sup>42)</sup>これらの記録から、ポルシネフは、ドゥディンスクに拠点を築いた頃から、ロシア各地から流入する農民や貧民が増加したことを強調し、この時期に「自然発生的な反封建的農民運動が各地で燃え上がった。これらの農民の一部や都市貧民は、結合の中心を求めて、ドゥディンスクの陣営にひきつけられた」と述べている。<sup>43)</sup>注意したいのは、ここでの彼の真意が、他の地域から居住地を捨てて流入してくる農民や都市貧民が急速に増加したことによって運動が高揚したことを強調するというよりは、むしろ、そのために軍団の性格に変化が生まれ、カザークとしての統一性や戦闘力の弱体化を招いたという事実の強調にあるように思われることである。カザーク軍が、政府の意向にかかわらず独自に行動できたのは、政府さえも無視することのできないその戦闘力にあった。そしてそれは、カザークの武力によっていたのはもちろんであるが、日々の生活において在地の農民たちと結びつくことにより、いわば独自の基盤を確立していたことによるところが大きかったと思われる。<sup>44)</sup>在地に基盤を持たない人々が大量に加わったことにより、社会運動としては発展・拡大したとしても、それに

よってカザーク軍にとって重要な統一性と安定性が損なわれてしまったこと、それが、その後の陣営の運命に大きく影響したというのがポルシネフの主張の要点であるように思われる。これまで、政府と微妙な距離を保っていた自由カザークの活動は、居住地を捨ててきた農民や都市貧民の運動と結びつくことによって強化されるのではなく、反対に、いわば足かせをはめられ、またいやおうなく反政府的性格を帯びざるを得なくなった。逃亡民たちの運動と合体することはもとよりできず、かといってそれと距離をとることもままらなくなった自由カザークは、自らの意志で行動することがしだいに困難になっていく。こうして、農民・逃亡民の運動が高揚する陰で、政府とカザーク軍の力関係は微妙に変わりつつあった。

1634年2月末から3月前半にかけて、陣営の活動は高揚期を迎える。ポルシネフは、この時点で、二つの過程を区別すべきであると主張する。<sup>45)</sup>一つは、ドンやヤイクの本来のカザークに対して、彼らの周辺に集まる逃亡ホローブや自由民からなる「自由カザーク」(《охочие казаки》)の数が絶えず増え続けたということである。2月25日のナウモフの報告によると、彼のもとにいたカザーク、つまり政府に対して勤務義務を果たそうとする人々は、隊長(頭領)や副官(есаул)を含む1219人であったのに対して、逃亡民たちが集まっていたドゥディンスク郷のヴェルホヴェツ村には、ほぼ1か月後の3月20日頃には、およそ8千人がいた。<sup>46)</sup>カザークが陣営の中心であったことに変わりないとしても、増大する他の構成員の利害と影響力もしだいに無視できなくなっていったであろう。また、



ドゥディンスク郷に集まっていた集団相互のあいだにも相違があり、利害対立も当然あったにちがいない。第二に、この3月には、カザークらの運動に触発されて、農民独自の運動がモスクワの周辺一帯に広がっていたとボルシネフはいう。ここでは、通常の例とは異なり、地方から首都に逃げ込む者もいたらしい。<sup>47)</sup> ポーランドとの戦争が困難をきわめていた時期に、農民たちの運動も高揚していたと考えてよいだろう。

かつてのカザーク軍は、人数は多いものの戦闘集団としての一体性や戦闘力を欠いた雑多な群集からなる、政府からみれば不穏な集団と化しつつあった。にもかかわらず、政府は、相変わらずこの集団を政府軍に組み込むための努力を続けていたらしい。これに関して、ボルシネフが挙げている根拠はまことに興味深い。彼によれば、ポーランド軍に一矢を報いるために、政府は3月6日に三度目の、これまでで最大の動員をかけたが、まさにこのときに、ドゥディンスク陣営に対して一つの文書を発していたという。そのオリジナルは残されていないが、3月から4月にかけて出された別の3通の文書に、「バラシについて」《... о Балаше》「バラシについての言葉」《о Балаше слово》という、後に書き加えられたらしい注記が残されているという。<sup>48)</sup> 文書の正確な内容はもとより不明であるが、ボルシネフによれば、それは1年前に獄死したイヴァン・バラシをパルチザン戦の先駆者として称揚し、彼の忠義の意志に敬意を表するとともに、「カザークとすべての自由人たち（охочие люди）」にバラシの後継者であるように訴えるものであった。つまり、いわばバラシの名誉回復を明らかにし、それによっ

て、彼にならってポーランドに対する自発的な戦いを起こすようにカザーク軍に訴えるものであった。命令するのではなく、彼らの側に歩み寄ろうとするこの政策転換について、政府は、「カザークが軍司令官に服従することを求めただけでなく、彼らと共通する言葉を発見しようとした」とボルシネフは述べている。<sup>49)</sup> 実際、これまでの政府の動向から判断する限り、ボルシネフのこの主張には現実味がある。また、この「言葉」が後に削除されたのは、この試みが失敗したからであるという彼の見解も首肯しうる。しかし重要なことは、カザークに対して政府がここまで譲歩しようとしたこと、それにもかかわらずこの試みが失敗に終わったことの二つであろう。その理由は少なくとも二つあるように思われる。一つは、すでに指摘したように、陣営がかつてのような自治組織としての武装集団ではなくなっており、頭領たちの影響力をもってしても、陣営全体をまとめることができなくなっていたと思われること、いまひとつは、モスクワでホローブの逃亡を煽動していた頭領И.テスレフ<sup>50)</sup>を、政府が逮捕せざるを得なかったことである。テスレフ逮捕を知らせる通達は、「言葉」がドゥディンスク陣営に届けられたのとはほぼ同時であったという。この一件に反発したカザークによって政府との対話の道は断たれてしまい、「言葉」による政府の譲歩も意味がなくなってしまった。<sup>51)</sup>

それでもなおカザークに譲歩を重ねて、政府はここで思い切った措置に出た。カザークとの決裂から少しあとの4月12日に政府はテスレフとその仲間たちを釈放し、押収していた馬と装備までも返却したのである。<sup>52)</sup> 明らかに、ドゥディンスクのカザークに対して

和解を求める政府のシグナルであった。だが、テスレフは、この措置に感謝を表明するでもなく、再びモスクワ周辺の運動に身を投じ、陣営も何の反応も示さなかった。

陣営のカザークと和解・妥協するための方策にことごとく失敗した政府は、ここに来て、カザークにいわば「最後の訴え」を行った。ナウモフに代わった新司令官ブナコフから彼らに伝えられたそれは、カザークの正教信仰を呼び覚まし、恩賞によって報いることを約束して、「古来からの永遠の敵」ポーランド・リトアニア人との戦いに立ち上がるように訴えるという、まことに率直なものであった。<sup>53)</sup>そして、これがカザークとの和解・妥協を求める政府の最後の方策となった。実のところ、これもまた遅すぎたのである。統制が十分に取れなくなっていたカザーク軍は、すでに4月初めにメシチョフスクでポーランド軍旗下のチェルカース（ザポロージェ・カザーク）に大敗して軍事集団としての機能を喪失し、最後の訴えで政府が期待をかけていたパルチザン戦すら不可能となっていたのである。これ以後、陣営ではカザークの統制すら効かなくなってしまった。それでも、司令官ブナコフは、なおこの軍をセフスク（ブリャンスク）に向けて行軍させようと努めたが、もとより不首尾に終わる。これ以後、陣営はブナコフとも袂を分かち、<sup>54)</sup>その結果、最終的に政府の働きかけの対象ではなくなったのである。

状況がどう変化しようと、これまで一貫してカザーク軍の帰順を求めて譲歩を重ねてきた政府も、ここに来てついに万策尽きた。政府に残された道はもはや和解と妥協ではなく、いまや反乱軍と化した陣営の、力による制圧だけであり、そのための大前提が、ポーラン

ドとの講和の実現であった。しかし、ポーランドとの戦いの継続、そのためのカザークとの妥協を一貫して追求していたミハイル政府にとって、この方針転換は出口の見えない道であった。ところが、ロシア政府が先の見えないその道を歩みだす前に、ほかでもないポーランド軍がその道を切り開いた。既述のように、ポーランド軍が、カザークを破ったからである。頼みの戦力を失ってしまったうえに、国内に不穏な勢力を抱えてしまった政府は、ポーランドとの和平交渉に舵を切らざるを得なくなった。

## おわりに

ポルシネフは、ミハイルがツァーリになると動乱は急速に収まったという理解が定説になっているが、それは事実とは異なると批判して、<sup>55)</sup> 1957年の論文で考察した「バラショーフシチナ」のその後について、1963年の論文で改めて検討を加えた。この内容豊かな論文を政府の立場に立って読んでみると、ミハイルとフィラレート（1633年10月1日死）の政権基盤が、1630年代初頭にもまだ不安定な状態にあったことが改めて確認できる。それは、政府とつかず離れずの関係を保っていたカザーク軍に対する政府の姿勢を具体的に見ることによって明らかになる。

カザーク軍に対する政府の方針は、一貫したものだだったといえる。それは、まず農民その他の逃亡民の群れからカザークを切り離し、そのうえでカザークを全体として政府軍の戦時編成に編入し、ポーランドと戦うための重要な戦力として活用するというものであった。政府にとって、動乱時代にその実力を示したカザークの戦力は、ポーランドと戦ううえで、

どうしても必要だったからである。したがって、この目的を達成するためには、具体的な政策において、カザークへのたび重なる譲歩と妥協も辞さなかった。状況が変化しようとも、変わることなくほぼ一貫して追求されたこの政策から、ミハイルの帝位を認めないポーランドと徹底して戦うことによって、ミハイルの帝位とロマノフ家によるその継承をなんとしても確立しようとする政権の強い意志をみて取ることができるように思われる。

しかし、政府とカザークを取り巻く情勢の変化は急速で、その結果、政府の対応は後手にまわり続けた。例えば、窮地に立ったシェイン軍に対する救援も、カザークとの交渉が長引いたうえに、カザーク軍が「味方」の攻撃に向かったため失敗に終わった。だがそのうちに、今度はカザーク軍にも変化が生じた。ロスラヴリからモジャイスクへの行軍を命じた政府の意向に反してブリャンスクを荒らし、コゼリスクに陣営を築くと、軍務を放棄した中下級勤務人、モスクワも含む各地のポサード民や逃亡ホロープなどが相次いでこれに合流してきた。その結果、陣営の規模は大きくなったものの、自治的な軍事集団としての一体性と戦闘力が弱められ、その性格も不断に略奪を不可避とする集団に変化した。実際、日々の糧を得る手段のない多数の人々にとって、これ以外のどんな方法があったろうか。このときから、かつてのカザーク軍は、既存の秩序からはみだした「反乱軍」、「蜂起軍」という性格を帯びざるを得なくなった。陣営のこの変化によって、政府の政策も再び時期遅れのものとなった。政府の対カザーク政策は、たとえ内部に対立があったとしても、最終的にはカザークの指導部がドゥディンスク

の陣営を十分に掌握していることが前提とされていたからである。こうして、政府もカザークも、ともに思惑通りの動きができない袋小路に入り込んだ。

この状況に終止符を打ったのは、ほかでもないポーランド軍であった。メシチョフスクでの敗北により、1634年4月初めにはカザーク軍はその戦闘力をほぼ失ってしまった。ここにいたって、およそ4か月間にわたって続けられてきた政府のカザーク政策は何の成果も生み出すことなく、その努力も水泡に帰した。こうなった以上、残された道は、敵国ポーランドとの講和を一刻も早く実現し、そのうち反乱軍を力で制圧することだけであった。政府にとって幸運であったのは、ウワディスワフ4世に帝位の要求権を放棄させるのに成功したことであった。これは戦争の目的の一つを達成したものであり、領土の回復はなかったものの、ミハイルの帝位を最終的に認めさせたという意味で、政府にとっては政治的に大きな成果であったといえよう。両国の懸案が解決されたことで、講話締結への道も開かれた。これ以後、イヴァン・バラシに始まったスモレンスク戦争中のカザーク-農民の運動はひとまず収束に向かい、ミハイル政府は、さしあたりの危機を乗り切ったのである。同時に、これによって社会統合のさらなる課題も見えてきた。南部辺境の地でなお勢力を保持しているカザークと新たな関係を築くこと、これが政府の次の課題となろう。それはまた、ある意味では旧来の体制の外に存在していたカザークが、新たな社会統合の結果であるツァーリズムという新体制の中に取り込まれていく過程でもあった。

## 註

- 1) Алексеев Л.В. Смоленская земля в IX—XIII вв. М., 1980.
- 2) Александров С.В. Смоленская осада 1609—1611. М., 2011.
- 3) 例えば、Б.Ф.Полшневは、スモレンスク戦争開戦前後の時期の社会的・政治的雰囲気として、農民の逃亡が多かったことに示される農奴制に対する不満の高まりと、ツァーリのミハイルとその父フィラレートの地位と権力の正当性を疑問視する動きが少なくなかったことの二つをあげ、両者は相互に関連していたと述べている。Поршнев Б.Ф. Социально-политическая обстановка в России во время Смоленской войны. 《История СССР》 No.5, 1957, стр.118—119. — В дальнейшем: Обстановка. のみならずПолшневは、帝位の決定について、慣習は世襲原理にあったのではなくむしろ選挙原理にあったとするП.П.Смирновの発言を引用している。Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.119.
- 4) 以下の叙述については、拙稿「君主と貴族と社会統合 ロシアの場合」小倉欣一編『近世ヨーロッパの東と西 共和政の理念と現実』（山川出版社、2004年）参照。
- 5) 動乱時代については、栗生沢猛夫『ボリス・ゴドノフと偽のドミトリー 「動乱」時代のロシア』（山川出版社、1997年）参照。
- 6) 以下の叙述については、拙稿「近世ロシアの軍隊と国制に関する諸研究」中近世ロシア研究会編『中近世ロシア研究論文集』（2014年）（以下、「近世ロシア」と略記）を参照。
- 7) カザークに関する古典的な研究としては、Cresson, W.P. *The Cossacks: Their History and Country*. New York, 1919. が著名である。また16世紀のウクライナを舞台としたカザークの活動については、Gordon, Linda *Cossack Rebellions: Social Turmoil in the Sixteenth—Century Ukraine*. NY., 1983. その他の諸研究については、拙稿「近世ロシア」82頁参照。また、18世紀のロシア軍におけるカザークの位置については、豊川浩一「植民国家」ロシアの軍隊におけるカザークの位置—18世紀のオレンブルク・カザーク創設を中心に—『歴史学研究』881号（2011年）を参照。なお、専門書ではないが、植田樹『コサックのロシア《戦う民族主義の先兵》』（中央公論新社、2000年）は、カザークの歴史を、ソ連崩壊後のロシアの政治状況を強く意識する中で描いており、一読の価値がある。とりわけ、カザークの復活は、「国家機能が正常に果たされなくなり、国境線の警備や国内秩序の維持のためにコサックの伝統的な役割を期待する」風潮が強まった結果ではあるが、「しかし、武装する集団としてのコサックの復活はいかに国家の監督下に置かれるとはいっても、いつか、どこかで歯止めが効かなくなる危険が常につきまとう。」（291頁）という指摘は、国家権力とカザークの関係史を振り返るとき、まことに示唆的というべきである。
- 8) これについては、栗生沢、前掲書、181—188頁参照。
- 9) 実際、かつてのバラシの蜂起軍が分裂したのは、政府によるこの種の働きかけによるものだったという。Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.123—127.
- 10) Там же, стр. 118.
- 11) Там же, стр. 119—120.
- 12) 三十年戦争とロシアのかかわりについては、さしあたり次の文献を参照。Вайнштейн О.Л. Россия и Тридцатилетняя война 1618 — 1648 гг. Л., 1947. ; Porshnev, B.F. *Muskovy and Sweden in the Thirty Years' War, 1630—1635*. Cambridge UP, 1995.
- 13) Porshnev, B.F. *op. cit.* pp.63—67.
- 14) 軍事史の観点からのまとまった研究としては、

- Сташевский Е. Смоленская война 1632—1634 гг. Организация и состояние Московской армии. Киев, 1919.がいまなおほとんど唯一であろう。
- 15) 拙稿「スモレンスク戦争（1632—34年）とロシアの軍隊」『ロシア史研究』第66号（2000年）。以下、「スモレンスク戦争」と略記。
- 16) スモレンスク戦争の経過および以下の叙述については、拙稿「スモレンスク戦争」5—8頁参照。当該戦争についての比較的まとまった叙述として、次の文献もあげておく。
- Тарас А. Е. Войны Московской Руси с Великим княжеством Литовским и Речью Посполитой в XIV—XVII веках. Издание 2-е, исправленное. М., Мн., 2006.「知られざる戦争」と銘打たれたシリーズの一書である本書は、基本的にС.М.ソロヴィヨフなど革命前の歴史家の著作によっている。
- 17) полки нового строя. 新編軍（新編成軍）という訳もあるが、これは必ずしも適切とはいえない。旧式の軍隊を新たに編成した場合でも、新編成軍といえるからである。ちなみに、前掲拙稿では、ピューリタン革命の際のNew Model Armyの訳語を借用して新型軍としていた。
- 18) Тарас А.Е. Указ.соч.стр. 597. また、開戦に向けたロシアの動員と兵力については、拙稿「スモレンスク戦争」6—7頁参照。ちなみに、1632年はじめの段階で、騎兵・歩兵のカザーク4万がツァーリの隷下にあったとする見解があるが、これはあくまでも計算上のものであって、実数と考えるわけにはいかないだろう。Тарас А.Е. Указ.соч.стр. 595.
- 19) いつの時代でも、攻囲戦は過酷なものであった。近世の攻囲戦については、クリстал・ヨルゲンセン他著／浅野明監修・竹内豊他訳『戦闘技術の歴史3近世編』（創元社、2010年）245—304頁参照。
- 20) 拙稿「スモレンスク戦争」8頁。
- 21) 前出の註3）参照。
- 22) Поршнев Б.Ф. Развитие «Балашовского» движения в Феврале-Марте 1634 г. В кн. :Проблемы общественно - политической истории России и славянских стран. М.,1963. — В дальнейшем :Развитие.
- 23) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр. 226. См. АМГ. т. I, СПб., 1890, №603.
- 24) カザークたちは、しばしば在地農民たちの住居に分宿していたらしい。Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.133.そうであれば、農民とカザークとのあいだに利害の対立は当然あったと思われるが、それでも政府や軍司令官の介入によって両者を離間させるのは、それほど簡単ではなかったであろう。この点でボルシネフが、「カザーク-農民」という表現をしばしば用いていることに注意したい。この頃の社会運動をおしなべて「農民運動」と規定していた当時の定説に対して、穏やかに異議を唱えていると考えて良いだろう。このような姿勢は、彼の研究に一貫してみられる特徴である。ちなみに、三十年戦争に関する彼の著作の英語訳（抄訳）の書評で、ステファン・トレブストは、「特に新しいものはないが、公式の観点に対するその批判には幾分か根拠がある」と述べている。
- 《Jahrbücher für Geschichte Ost Europas》, Bd.45. 1997, Heft 4, S.631.
- 25) Поршнев Б.Ф.Обстановка, стр.134—135.
- 26) Поршнев Б.Ф.Развитие, стр.226.
- 27) シェインのとった緩慢な行動を、意図的な裏切りと解釈するのは十分な根拠に欠ける。ボルシネフは、シェインの役割は西方でのスウェーデンの作戦行動を可能にするためにポーランド軍を東部にひきつけておくこと

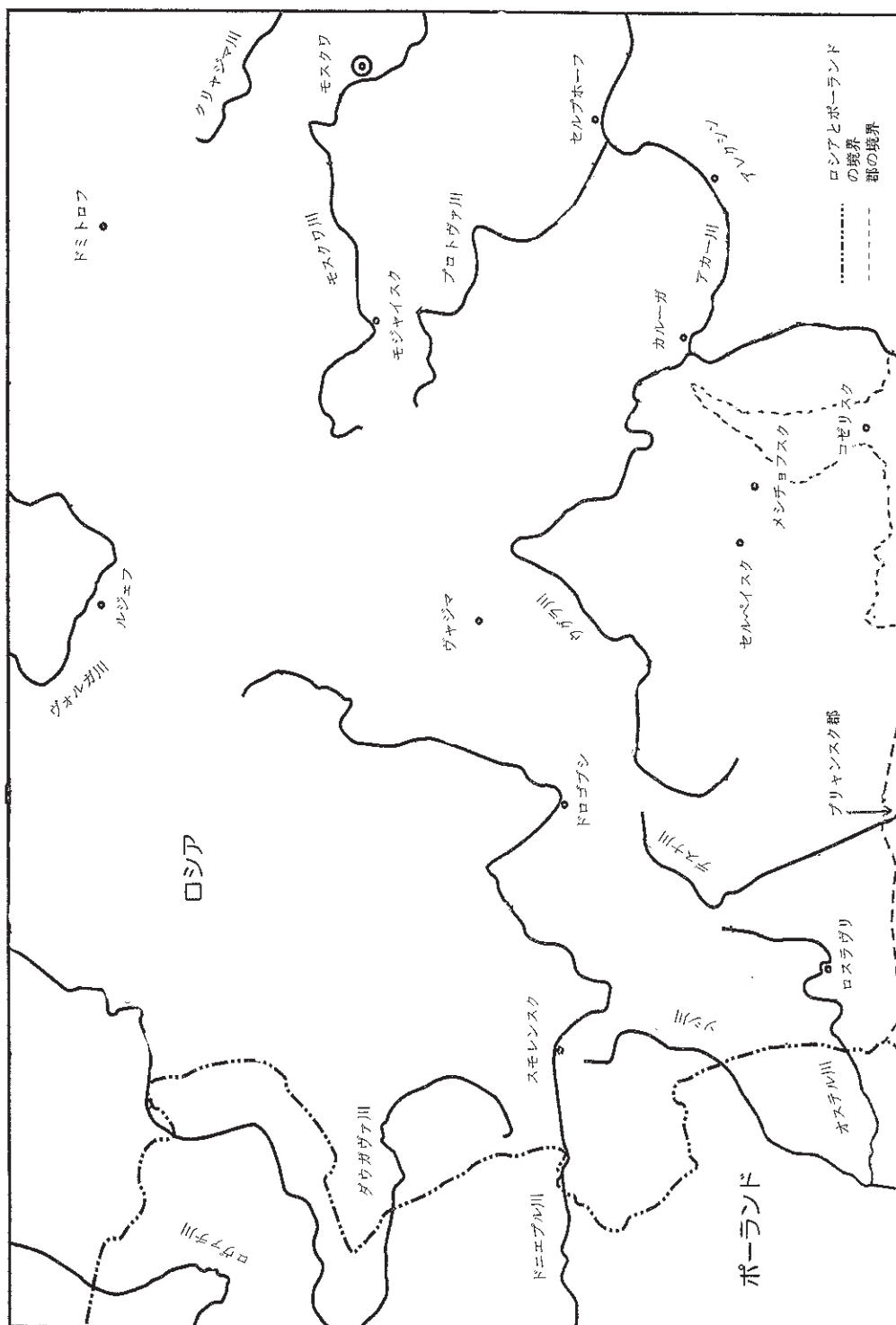


- であり、彼はその任務を忠実に実行しようとしたと主張している。Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.113. それにしても、前線の軍の動きが鈍いと、ただちに司令官の裏切りを取りざたされるというところに、当時、名門貴族のあいだでの疑心暗鬼が深刻なレベルにあったことをうかがわせる。年表の1634年4月2日の条も参照。
- 28) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.231.
- 29) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.231 – 232. 文脈はまったく異なるが、この時期にはツァーリとしてのミハイルに対する不信の念が、農民などにもあったと思われる。例えば、ロスラヴリからカザークたちが行軍に出た2月6日に、在地のサツヴァ・スティモフなる農民が、寄宿していたカザークたちに、「ツァーリは、生まれながらのツァーリではないらしい」という「不敬の言葉」を吐き、密告によって逮捕されたという。Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.133.
- 30) Там же.
- 31) ポルシネフは、ミハイル政府は1633年11月～12月に、「バラショーフシチナ」から勤務人である士族・小士族層を切り離す策を採ったとし、その論拠として、負傷した勤務人に対する金銭補償、当該戦争の戦死者の未亡人の土地から徴募を行わないこと、貧しい勤務人に対する貨幣賦与などを定めたツァーリの布告をあげている。Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.132. しかし、これが仮に勤務人層に対する懐柔策であったとしても、これはいま検討している時期より2 – 3か月前のことであり、この間に戦況も政治状況も変化していることに留意すべきである。上述の布告は、次の史料集でも確認できる。Законодательные акты Русского государства второй половины XVI – первой половины XVII века. Тексты. Л., 1986. Комментарии. Л., 1987. №208. См. №206, №207, №209, №211, №212.
- 32) 頭領チェルトブルードの活動については、Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.135 – 136 を参照。
- 33) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.227 – 228. ;Его же. Обстановка, стр.136.
- 34) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.227.
- 35) Там же, стр.228.
- 36) Там же, стр.227.
- 37) Там же.
- 38) Там же, стр.228. См. АМГ. т.I, №655.
- 39) Там же.
- 40) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.229.
- 41) Там же.
- 42) Там же.
- 43) Там же.
- 44) 前出の註24) 参照。
- 45) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.230.
- 46) Там же. См. АМГ. т.I, №655.
- 47) Там же.
- 48) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.232.
- 49) Там же.
- 50) Поршнев Б.Ф. Обстановка, стр.135. テスレフについては、年表の1634年3月20日と4月12日の条を参照。
- 51) Поршнев Б.Ф. Развитие, стр.232 – 233.
- 52) Там же, стр.233.
- 53) Там же, стр.235.
- 54) Там же.
- 55) Там же, стр.225.

## 年表 スモレンスク戦争とロシア内外の動向（ロシア暦による）

1631年 9月	ブライテンフェルトの戦い、スウェーデン軍が皇帝軍を破る。
12月	ロシアで、新式軍の歩兵2個連隊が編成される。
1632年初め	新式軍の歩兵が6個連隊に拡充される。（その後、スモレンスク戦争中に、重騎兵6個連隊（約2千騎）、歩兵2個連隊、独立歩兵1個中隊、竜騎兵1個連隊が編成され、3兵科合計で10個連隊、総兵力1万7千となる。）
4月	ポーランド王ジグムント3世の死
6月	全国会議で、対ポーランド戦の開始が決定される。
8月3日	スモレンスク防衛戦（1609－11）の英雄M.Б.シェインの遠征軍（3～4万）がモスクワを進発。スモレンスク戦争始まる。
9月～	スモレンスクの攻囲戦が始まり、戦局が膠着状態になる。
11月	リュッツェンの戦い、グスタフ・アドルフ戦死
1633年 6月	攻城砲を用いたシェイン軍の攻撃が失敗に終わる。この頃、クリミア・タタール侵入の報に、少なからぬ数の士族が戦線から離脱する。
8月	ポーランド王ウワディスワフ4世の援軍により補給基地ドロゴブシが占領される。
10月1日	フィラレートの死
12月	政府が、ロスラヴリのカザーク軍に、司令官としてИ.В.ナウモフの派遣を決定
12月～	政府による二度目の動員が実施される。宮廷内で親ポーランド派（反ミハイル）と反ポーランド派の対立があったが、この頃に後者が優勢になった？
1634年 1月	
1月6日	司令官ナウモフの着任直前に、ロスラヴリのカザークが「すべての自由民」の名でツァーリに2通の嘆願書を提出し、自らの要求を提示する。
2月3日	シェインが政府に援軍を依頼し、これに対応して政府がГ.ヴォルィンスキーを救援軍の拠点モジャイスクに送る。
2月6日	ヴォルィンスキーが、司令官И.М.チェルカスキーの「速やかに行動を開始する」旨の返答を持ってモスクワに帰任 ナウモフ旗下のロスラヴリ軍（カザーク軍）が行軍を開始するが、命令に従ってモジャイスクに向かうのではなく、ブリャンスク郡の士族・小士族の攻撃に向かう。
2月15日	カザークの頭領А.チェルトブルード旗下の部隊が、モスクワとモジャイスクから多くのホローブや銃兵その他を伴ってブリャンスクに帰還。司令官ナウモフと会談。
2月16日	シェインが降伏文書に署名
19日	シェイン軍がドロゴブシから撤退
20日～	カザーク軍がブリャンスク周辺の領主所領その他を略奪
21日	
22日～	頭領チェルトブルードの率いるカザーク軍がブリャンスクから小士族、ボサード民、下級勤務人などを受け容れたあと、コゼリスク郡に移動。カルーガから移動中の銃兵のうち約100人がこの軍に逃亡したという百人長からの訴え。チェルトブルードの軍が、コゼリスク郡のドゥディンスク郷の陣営に到着。ここから一部は政府の命令に従ってモジャイスクに向かうが、一部は陣営に残ってツァーリの勤務を事実上拒否。その後も、陣営にはさらに多くの人々が流入する。

- 25日 病気を理由に退役が認められた前司令官ナウモフが報告書を提出。彼のもとには、1219人のカザークがいた。
- 3月初め 自己の領民がモスクワに逃げ込んでいる旨の大膳職オチン・プレシチェーエフの嘆願書。3月12日に彼に帰郷の許可が出る。この頃、政府軍の再編成が行われる。また、スーズダリ大主教ヨナが、親ポーランドの陰謀の嫌で修道院に幽閉される。
- 3月2日 シェインの降伏について調査委員会設置
- 3日 チェルカスキーとボジャルスキーがシェイン降伏の経緯について報告
- 4日頃 シェインらがモジャイスク近くで逮捕される。
- 3月6日 政府が予備兵力に動員をかける。この頃「バラシについての言葉」が出された？
- 前半 モスクワ南部諸郡の小士族による帰郷の嘆願について、ボロフスクの司令官クラキンが報告。モスクワで4月11日に受理される。この頃、モスクワ南部地域一帯でカザークや逃亡民による暴行・略奪等が広範に展開される。
- 3月17日 ドゥディンスク陣営へのツァーリの文書。チェルカスキーとボジャルスキーの旗下に入ることを求めつつ、それと同一行動を取ることを求めず、セフスク（ブリャンスク）の救援に向かうように命令。陣営はどちらの命令も拒否。それにもかかわらず政府は、陣営が求めているメシチョフスクのポーランド軍への遠征を許可する。
- 17日～ 新司令官ブナコフがモジャイスクからコゼリスクに着任。前任者ナウモフから装備の
- 18日 リストを受領するが、兵員名簿は提出されず。
- 20日 ブナコフがドゥディンスク郷からコゼリスク郊外に軍を移動させ、以後3週間そこに留まるが、軍を統率できず、セフスクにも行軍させられず。のみならず、ドゥディンスク陣営にはなおも人々の流入が続く。例）逃亡ホローブを主力とする頭領I.テスレフの部隊500人が合流。さらに、カルーガその他から150人が合流。この頃、陣営はおよそ8千人になる。
- 28日～ 頭領ミキフォルとともにカルーガなどから50人が陣営に合流、その後も流入が続く。
- 3月31日 コゼリスクに対するポーランド軍の攻撃が、カザークによって撃退される。
- 4月2日 陣営の動向について司令官ブナコフから最初の報告。陣営が動かないことから、モスクワではブナコフに裏切りの嫌疑がかけられていたが、その嫌疑が晴れる。
- 4月初め メシチョフスクでカザークがポーランド軍に大敗。以後、パルチザン戦も衰退。
- 4月9日 ブナコフが、再び軍をセフスクに動かそうと試みるも失敗。
- 4月12日 政府が、モスクワで逮捕していたカザークの頭領テスレフを釈放し、馬と装備を返却。しかし陣営は反応せず。
- 4月18日 シェインの降伏について、調査委員会の結論が出される。
- 21日 政府が、ブナコフをとおして、陣営に「訴え」を行う。
- 4月28日 シェインと副官イズマイロフが処刑される。
- 6月4日 ポリャノフカ講和条約調印、スモレンスク戦争終結。ウラディスワフが帝位の要求を放棄。スモレンスクその他の西部領土の回復はならず。



17 世紀初頭のロシア西部地方  
 (Александров С.Б. Смоленская осада 1609-1611. М. 2011.をもとに作成)